



審査員特別賞
最相葉月賞

ノーサイド

岩崎 真也

「ウンだろ……。」僕は信じていることができなかった。

雨が降り続き、時おり激しく僕らを打つ。ぬかるんだグラウンドで、黒ジャージのチーム名も見えないくらい泥だらけだ。そんなみんなが今、呆然と自陣インゴールに置かれたボールを見つめている。いや、みんなではない。ひぎを折り、泣いている奴もいるし、空に向かって「くそっ。」とさげんでいる奴もいる。視線を移すと、抱き合って、折り重なって、声にならないさげびをあげているやつら。泥まみれで、ほとんど茶色の白ジャージ。僕達の積年のライバルだ。

その光景を目をこらして見直した。何度も、何度も。でも、変わらない。間違いではない。試合終了間際、あと10秒、逆転のトライを決められた。僕は負けたんだ。

ゴールキックが終わり、ノーサイドのホイッスルが鳴った。今でもその音を鮮明に思い出す。僕達の目標が、願いが、本当に血を吐くような練習を重ねて追いつけたものが、まるで何もなかったように終わりを告げられた瞬間だった。

6月、梅雨空の下で行われた九州ジュニアラグビー県大会で僕は準決勝で敗れた。

よく「負けたけど全力をつくしたから、晴々とした気持ち。」という言葉が聞かされた。僕達のように「勝つ」ことを目標にした場合には当てはまらない。負ければくやしい。僕達が払ってきた努力は、そんなさわやかな言葉で終われるものではない。晴々とした気持ち、なんていう言葉は勝った方が言うことのできる言葉だ。

ノーサイドという言葉がある。試合が終われば敵味方

なく、お互いの健闘をたたえ合う。また、自らのプレーに恥じるところがなく、紳士的だったかを問う精神である。

僕は負けを引きずっている自分が、この精神になっていないことは分かっていた。だが、九州大会に進む相手チームに対して、正直応援する気にはなれず、そこにいるべきは自分達だったという思いを、どうすることもできなかった。

結果として、県3位となったため、九州大会Bパートへの出場が決定した。そして、その会場である大分県へ僕達は向かった。九州大会といっても全国大会に進むことはなく、九州3位を確定するための出場だ。みんなとまだ一緒にいられることはうれしかったが、何だか複雑な気持ちだった。

バスではみんないつものようにハシヤギ、ばかなことばかり言っていたが、心の底は同じ気持ちなのがよく分かる。それほど、僕はずっと一緒にいるから。

みんなをそっと見渡してみる。優等生で涙もろいキャ

プテンH。個性派ぞろいのメンバーに悔し泣きしたこともよくあった。でも誰よりも純粋にラグビーが好きなんだ。Sは持病で半年間、ずっと見学だったが、決してあきらめず、黙々と自分のできる練習を続けていた。その結果、レギュラーに復帰することができた。そして：と書き始めるときりがない。僕は小学生のまだ小さいころから、ずっとずっと一緒にいる。そのうち、だんだんと上手くいつている家族のような存在になっていた。みんな「全国大会」へ行くこと決めた。そのため、みんなあきらめたこともいろいろあったはずだ。

なぜかなわなかったのだろうか。今までやってきたこと、全てをかけてもかなわなかった時、どうすればいいんだ。みんなの顔を見て、そんなことを考えた。やみそうにない雨の中をバスはまるで思いをはねのけるかのように入っていく。

大会は2泊3日、九州中の強豪が集まって行われる。それぞれのチームのカラフルなジャージが緑の芝に映えて、きれいだなあと開会式の時に思った。ちよっと気分

の晴れるような感じがした。

福岡はラグビー王国だ。多くのラグビークラブが互いに切磋琢磨している。しかし、九州全体でもこれだけのクラブがあり、それぞれが仲間達と真剣にラグビーをしている姿を見るのは新鮮な光景だった。

宿舎には、僕達が敗れたチームも泊まっていた。もともと面識はある。主な選手は名前だって知っている。でもこうして、お互いとなりの部屋に泊まるなんて初めてだ。初めは横目でチラチラ、けん制し合ってたものの、夜がふけてくるにつれて他のチームもふくめての大宴会となった。

あの日、僕達のひざを折らせた相手の冗談に大笑いして、盛り上がる。何のこだわりを考えるひまもなかった。もうどいつがどこのチームか分からない状態だ。

みんな容しやなくやり合う中、一人だけがさりげなく気を使われていた。誰よりも明るく、とても面白い奴だったが、激しいやりとりには加わらない。彼は僕達が敗れたチームのキャプテンで、冬頃に首の骨折という

大ケガをしていた。長い入院生活を終え、やっと日常生活に戻ることができた。だが、試合には出場できない。

キャプテンなのにチームメイトが必死でプレーしているのを見てはしかできない。どんなに悔しいだろう。もどかしいだろう。でも、チームから離れることなく、最後まで見守っている。ラグビーをあきらめていない。敵も味方もなく、ここに集まったラグーマン全員で楽しもうとしている。

偉い奴だな、と心から思った。そんな彼をずっとキャプテンとして待ち続けてきた相手のチームもまた、絶対に負けられない思いがあったんだと知った。

山の上の風はとても涼しく、汗ばんだ体だけでなく、しめっていた僕の心までさわやかにかわいていくように感じた夜だった。

3日間の試合を終え、僕達は九州大会Bパート優勝という結果を残すことができた。コーチ、お父さん、お母さんも嬉しそうだった。今まで自分の悔しい思いばかりで周りが見えていなかった。それを受けとめてくれる人

がこんなにいる。感謝してもきれいなほどだ。これからも誇りに思ってもらえるようがんばろう。

あのキャプテンのチームは優勝し、全国大会への出場を決めた。閉会式を終え、写真とろうぜ！と2チームいっしょに写真をとった。みんな笑っていた。なんだか仲間が増えたような気分だった。そう、もうみんなは「宿敵」ではないのだから。

この大会を最後に、どのチームも解散だ。僕達もそうだ。大切に、大切に紡いできた輪を、それぞれの未来へ向かい解かなければならない。でもそれは終わりとは違う。いくつもの輪がほどけ、また新しい輪ができるんだ。断ち切られるのでないから、僕達はまたきつと、芝の上で交わることだろう。9年間一緒だったみんなの笑顔を目に焼きつける。

ノーサイドだ。みんなもそんな気分だといいな。いや、見れば分かる。全員がそう感じている。「うん、ノーサイドだ。」みんなにもみくちやにされながら、僕は腹の底から笑った。